

赦せる心

[聖書] 創世記 45章1～15節

ヨセフは、そばで仕えている者の前で、もはや平静を装っていることができなくなり、「みんな、ここから出て行ってくれ」と叫んだ。だれもそばにいなくなってから、ヨセフは兄弟たちに自分の身を明かした。ヨセフは、声をあげて泣いたので、エジプト人はそれを聞き、ファラオの宮廷にも伝わった。ヨセフは、兄弟たちに言った。「わたしはヨセフです。お父さんはまだ生きておられますか。」兄弟たちはヨセフの前で驚きのあまり、答えることができなかった。ヨセフは兄弟たちに言った。「どうか、もっと近寄ってください。」兄弟たちがそばへ近づくと、ヨセフはまた言った。「わたしはあなたたちがエジプトへ売った弟のヨセフです。しかし、今は、わたしをここへ売ったことを悔やんだり、責め合ったりする必要はありません。命を救うために、神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのです。この二年の間、世界中に飢饉が襲っていますが、まだこれから五年間は、耕すこともなく、収穫もないでしょう。神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのは、この国にあなたたちの残りの者を与え、あなたたちを生き永らえさせて、大いなる救いに至らせるためです。わたしをここへ遣わしたのは、あなたたちではなく、神です。神がわたしをファラオの顧問、宮廷全体の主、エジプト全国を治める者としてくださったのです。急いで父上のもとへ帰って、伝えてください。『息子のヨセフがこう言っています。神が、わたしを全エジプトの主としてくださいました。ためらわずに、わたしのところへおいでください。そして、ゴシェンの地域に住んでください。そうすればあなたも、息子も孫も、羊や牛の群れも、そのほかすべてのものも、わたしの近くで暮らすことができます。そこでのお世話は、わたしが引き受けいたします。まだ五年間は飢饉が続くのですから、父上も家族も、そのほかすべてのものも、困ることのないようになさなければいけません。』さあ、お兄さんたちも、弟のベニヤミンも、自分の目で見てください。ほかならぬわたしがあなたたちに言っているのです。エジプトでわたしが受けているすべての栄誉と、あなたたちが見たすべてのことを父上に話してください。そして、急いで父上をここへ連れて来てください。」ヨセフは、弟ベニヤミンの首を抱いて泣いた。ベニヤミンもヨセフの首を抱いて泣いた。ヨセフは兄弟たち皆に口づけし、彼らを抱いて泣いた。その後、兄弟たちはヨセフと語り合った。

[序] 報復しなかったヨセフ

ヨセフほど浮き沈みの激しい人生を送った人もめったにいないでしょう。イスラエルの三代目の族長ヤコブの秘蔵息子に生まれながら、兄たち10人の妬みを買って、エジプトの奴隷に売られてしまいました。やっとのことで主人の家の管理人にまで這い上がったら、主人の奥さんの誘惑にあい、偽りの告げ口をされて、監獄にぶち込まれてしまいました。しかし10年近い監獄生活の中から、大国エジプトの総理大臣に一躍出世しました。そして世界的な大飢饉の中で、国を救う立派な業績を残したのです。

私たちの国日本では、自民党総裁が代わり、麻生選挙内閣が誕生しました。18人の閣僚の中に、34才の女性が少子化対策の担当大臣に選ばれています。若い女性の投票を集める看板娘に過ぎないと、行政能力を疑問視する声が上がっています。一方ヨセフは30才で、突然大国エジプトの総理大臣に抜擢されました。ところが14年間にわたる国家の危機を、見事な行政手腕で救ったのです。18才で奴隷として売られて来てから監獄生活をずっと続けて来た男です。何処でどうやって、そんな実力を養ったのでしょうか。不思議ですね。

国王に次ぐ権力の座についた時、彼は自分に惨めな獄中生活をさせた侍従長の妻とその夫に対して、厳しい報復処置を下しても当然でした。あれほど救い出してくれるように頼んだのに、すっぽかして、2年も絶望的獄中生活を引き伸ばした給仕長の無責任さを、どのように咎めたのでしょうか。私だったら、侍従長夫婦には官位を剥奪して、10年間の監獄生活を、また給仕長に対しては、2年間監獄の看守長にでも降格処分しなければ、恨みがおさまらなかったでしょう。ところが聖書には、彼の報復の記述が一切ないので、

大飢饉になると、カナンの羊飼いやヤコブ一族はたちまち食料に困り、エジプトに買出しに やって来ました。10人の兄たちとヨセフとの対面です。ヨセフはかつての自分と同じ状況に置かれている弟のベニヤミンの身の上を案じました。もしも兄たちが、父に特別に可愛がられた自分に対してと同じ様に、弟を妬み憎んでいるのであれば、ベニヤミンを守ってやらなければなりません。兄たちがヨセフだと気が付かないのを幸いに、いろいろテストしてみました。すると兄たちが、あの時の罪を深く後悔して、変わってきているのです。父を愛し、弟を自分の命に代えてでも守ろうとしました。それが分かった時、彼は大声を上げて泣き出して、抱き合い、兄たちと和解しました。そして父ヤコブ以下一族全員をエジプトに迎えて、大飢饉から救いました。

このようなヨセフの態度から推測しますと、彼は10人の兄たちのみならず、侍従長や給仕長たちに対しても、報復しなかったのではないのでしょうか。人を赦すということは、私たちにとってなかなか出来ないことです。ひどい目に遭えばあうほど、赦せるものではありません。ところがヨセフは違いました。彼はどのようにして赦せたのでしょうか。そこが今日の主題です。

[1] 主語は神さま

ヤコブは食料がなくなったので、兄たち10人をエジプトに買出しに行かせましたが、末っ子のベニヤミンは案の定、手許に留めました。ヨセフは自分の前にひれ伏す兄たちを見て、エジプトの手薄な所を探りに来たスパイだろうと厳しく尋問し、末の弟を連れて来るように命じました。それは父を苦しめることであり、受け容れ難い要求です。彼らは自分たちがかつてヨセフに対して行ったひどい仕打ちへの罰を、今受けているのだと嘆き合いました。ヤコブはその会話を聞かぬ振りをして、次男のシメオンを人質に取り、9人を帰しました。

ヤコブはベニヤミンを連れて行くことを拒みました。長男のルベンが自分の息子2人の命に代えても、ベニヤミンを守るからと説得しますが、ヤコブは許しません。そのうちに食料が底をつきました。三男のユダが自分がベニヤミンの安全の全責任をとるから、許可して欲しいと訴えました。このままでは皆が飢死します。ヤコブも遂に折れ、特別の土産物を持たせて送り出しました。ベニヤミンを見てヨセフはひそかに泣きますが、ベニヤミンに盗みの嫌疑をかけて捕らえ、シメオンを釈放して兄たちだけを帰そうとしました。ユダは「この子連れずに帰って父の苦悶を見るに忍びません。自分を奴隷にしてこの子を帰らせて」と懇願しました。

兄たちの父や弟に対する思いを知ったヨセフは、声を上げて泣きました。その声はエジプト人の耳にも入り、国王にも伝わりました。ヨセフは身を明かしました。兄弟たちは驚きのあまり声が出ません。ヨセフはベニヤミンの首を抱いて泣きました。兄たち一人ひとりに口づけし、首を抱いて泣きました。ヨセフが語った

和解の言葉は次の通りです。

「わたしはあなたたちがエジプトへ売った弟のヨセフです。しかし、今は、わたしをここへ売ったことを悔やんだり、責め合ったりする必要はありません。命を救うために、神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのです。この二年の間、世界中に飢饉が襲っていますが、まだこれから五年間は、耕すこともなく、収穫もないでしょう。神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのは、この国にあなたたちの残りの者を与え、あなたたちを生き永らえさせて、大いなる救いに至らせるためです。わたしをここへ遣わしたのは、あなたたちではなく、神です。神がわたしをファラオの顧問、宮廷全体の主、エジプト全国を治める者としてくださったのです。」(45:4～8)

本来ならば、カナン地方のヤコブ一族の一人として、羊を飼って暮しているはずの自分が、今このようにして大エジプト王国の総理大臣となり、飢えで苦しむ人々に倉を開いて食べ物を与える働きをしている。確かにあの時自分を殺そうとした行動の主語は兄たちに見えるけれども、神さまがやがて起こる世界的大飢饉の折に、カナンで羊飼いをしているヤコブ一族をエジプトに移して、救おうというご計画をお立てになっておられたのだ。だから17才の自分に、兄や両親までもが自分にひれ伏すという夢を見させて、予告なさせていたのだ。

この一切の出来事の主語は神さまだった。だから神さまは兄たちの悪をも、そのまま許して、お用いになったのだ。神さまが大きなご計画の下に、こうなされたのだ。神さまは何という素晴らしいことをなさるお方なのだろう、という驚きと感謝に、ヨセフの心は一杯になったのではないのでしょうか。こうしてヨセフは、恨みや憎しみから解放されて、兄弟との再会を素直に喜び、和解することが出来るようになったのでした。神さまを主語にして過去を見直すと、全く新しい世界が開けて来るのですね。

[2] 神さまの働きに思いを集中する

私たちは人々を救おうとなさる神さまのお姿を、この目で直接に見ることはできません。しかし世界で起きる出来事の中に、神さまの御心を見出すことは出来ます。またご計画を予めお示しになり、対処するようにと警告なさる神さまの働きかけを、敏感に受け取ることも出来ます。ヨセフは夢を通して御心を示される賜物を与えられていたようです。17才の時には、与えられた二つの夢を、具体的に解き明かすことは出来ませんでしたでしたが、監獄生活を送った後の30才には、国王が見た夢を明確に解き明かすことが出来るまでに、成長していました。

大豊作の年が続きます。しかも7年も続くのですから、人々は豊かになり、好景気に浮かれて贅沢な浪費に溺れるでしょう。しかしその後で大飢饉に襲われるのです。たちまち豊かさは消えて欠乏にあえぐようになり、国は滅びるでしょう。豊作が続く内に、大飢饉に備える賢明な対策が欠かせませんとヨセフは進言しました。神さまを主語にして、世界の動きを見て対処する信仰をヨセフは持っていたのでした。王も家来一同もそれを、自分たちが持ち合わせていない聡明な知恵と受け取り、感心しました。そして神から与えられた聡明な知恵をもって働いて欲しいと、彼を総理大臣に任命し、彼は見事にその委託に応えたのでした。

神さまの姿を見ることが出来るのか。声を聞くことが出来るのか。手で触って確かめることが出来るのか。見ることも、聞くことも、触れることも出来ないのだから、もともと神は存在しないと多くの人は思っています。

しかし私たちは神さまを信じます。天地万物を造り、この世界をご支配しておられる全知全能の神さま、イエス・キリストを十字架にかけてまでも私たちを救おうとして下さる愛の神さまを信じます。人間がそれぞれの思惑で振舞おうとも、全ての者を救う究極を目指して、大きく世界を導いて下さっている神さまを信じます。

ヨセフは、優れた教育機関や役所で研修・訓練を受ける機会には恵まれませんでした。それどころか、この世でもっとも劣悪な環境である監獄の中で、ユダヤから売られてきた奴隷の囚人として、暗黒の青春時代を過さねばなりません。しかしこの世の日常から切り離された監獄生活だったからこそ、かえって目先の現象に惑わされることなく、ひたすらに見えない神さまの働きに思いを集中することが出来ました。そして神さまを主語にして、世の動きを見、自らの行動を考えていく信仰を磨き上げていくことが出来たのではないのでしょうか。

高い教育を受けた者や優れた行政能力を持つ者は、エジプトの宮廷に、幾人も居たでしょう。しかし歴史を創り出していく神さまの計画を知り、人をお用いになって御心を実現していかれる神さまの御業に的確に応答していく信仰の持ち主は、ヨセフの他に居なかったのです。歴史を見通す聡明な知恵と、人を赦し受け容れる穏やかで広い心を養う信仰が、私たちにとってどれほど大切かを、ヨセフは教えてくれています。

[結] 十字架の救い

ヨセフと兄たちとの和解には、後日物語が付いています。父ヤコブはエジプトに移住して17年後に、12人の息子たち全員に囲まれ、彼らを祝福して安らかに死にました。エジプトの国葬のような盛大な葬儀が営まれました。そして遺体は遺言通り、アブラハム、ヤコブ夫妻が葬られているカナン墓地に葬られました。その後で問題が生じたのです。

父が亡くなった。ヨセフが仕返しを始めるのではないかと、兄たちが怯え出したのです。「お父さんが亡くなる前にこう言っていました。『どうか兄たちの咎と罪を赦してやってほしい』どうか僕たちの咎を赦してください」これを聞いて、ヨセフは涙を流しました。もう17年も経っているのです。自分は真実に赦しているのに、その心が通じていない。何と気の毒な人たちなのだろうと思って泣いたのでしょう。そしてヨセフの前にひれ伏す兄たちに言いました。

「恐れることはありません。わたしが神に代わることができましようか。あなたがたはわたしに悪をたくらみましたが、神はそれを善に変え、多くの民の命を救うために、今日のようにしてくださったのです。どうか恐れなさい。このわたしが、あなたたちとあなたたちの子供を養いましょう。」（50:19～21）

兄たちはヨセフを主語にして、自分たちの運命を考えました。確かに私たち人間の世界では、心から赦すことは至難の業です。兄たちがいつまでも、怯え恐れるのは当然でしょう。しかしヨセフは違います。「わたしが神に代わることができましようか」。これは「神さまを主語にしないで自分を主語にして万事を考えることなど、私にはもう出来ないのです」という意味です。

神さまは私たちの悪を善に変えて、多くの民の命を救おうとしてくださる方です。そのお方がこの世界の真の支配者なのです。私はこの神さまを主語にして、全てを受け止めています。神さまは赦されました。だ

から私も赦しています。兄さんたち、本当に安心して下さい。あなた方とその子供たちの命を保証しますと言って、ヨセフは兄たちを慰めたのでした。

イエス・キリストは十字架につけられながら、「父よ、彼らをお赦してください」と祈りつつ死んで下さいました。この十字架にご自分の姿を現して下さいている神さまを、私たちは信じているのです。神さまはどんな罪でも赦して下さいのお方です。このお方を主語にして、私の人生を振り返る時、悪は善に変えられています。神さまが赦したその人を、私は受け容れます。そして私自身が恨み・怒りから解放されるのです。ここに信仰の恵みがあり、救いがあります。

今月の初めに、兄エサウを騙したヤコブが、殺されるのではないかと20年経っても怯えて身をすくませ、一晩中神さまにむしゃぶりついた箇所を学びました。漱石の小説「こころ」の主人公は、自殺してしまいました。ヨセフの兄たちも、21年振りにヨセフと再会して和解したはずなのに、それから17年経って尚過去の罪に怯えています。これが私たちの心なのです。

私たちの心は、自分の罪、人の罪によって深く、深く傷つくのです。私たちはそのことを、余りに軽く考えてはいませんか。

傷つきやすい心。心を深く傷つける罪。罪は本当に恐ろしいものです。でも私たちは罪を犯してしまいます。だからこそ神さまは十字架の救いを与えて下さいました。ここに神さまの愛と赦しを見出して信じ、救いにあずかりましょう。今日、十字架のイエス・キリストを救い主としてお信じになりませんか。

完